第122回日本外科学会

開腹手術に移行した腹腔鏡下手術の検討

A Study of laparoscopic surgery transferred from laparotomy

くまもと県北病院消化器外科[1)]、熊本大学大学院消化器外科学[2)]

高城克暢[1)]、石川晋之[1)]、石河隆敏[1)]、髙野　定[1)]、島本正人[1)]、馬場秀夫[2)]

【背景および目的】消化器外科領域における腹腔鏡下手術は現在多くの施設で行われている。腹腔鏡下手術は創が小さく、術後の早期回復が期待できるが、全ての症例が腹腔鏡下手術の適応になるわけではない。当院でも複数科の合同カンファレンスを行い、術前の画像所見や全身状態などを踏まえて術式を決定している。しかし腹腔鏡下に手術を開始しても術中に開腹手術へ移行せざるを得ない場合がある。今回、開腹手術に移行した腹腔鏡下手術症例について検討を行った。【方法】2018年9月から2021年8月まで、腹腔鏡下手術適応として開始した294例を対象とした。その臨床学的因子について解析し、開腹手術に移行した疾患名、頻度、要因についても検討し、開腹移行を防ぐ手段について考察した。【結果】同期間の全手術608例中、腹腔鏡下手術は294例（48.4%）で、そのうち開腹手術に移行した症例は17例（5.8%）であった。17例の内訳は胆嚢摘出術128例中6例（4.7%）、虫垂切除術70例中4例（5.7%）、結腸・直腸切除術44例中3例（6.8%）、胃切除術6例中1例（16.7%）、ヘルニア嵌頓4例中2例（50%）、絞扼性イレウス2例中1例（50%）であっ

た。開腹手術に移行した理由は癒着 5 例、切除部位同定困難 5 例、視野不良 3 例、浸潤または瘻孔 2 例、副損傷 1 例、出血 1 例であった。【考察】開腹手術へ移行した症例は癒着防止剤を使用されなかった開腹手術の既往、急性胆嚢炎や急性虫垂炎の高度炎症症例、腸閉塞症例などが多かった。また時間外緊急手術においては人手不足や手術に時間をかけられないこともあり開腹移行するまでの決断が早かった可能性が考えられた。開腹手術への移行を防ぐ手段としては、術前に超音波検査で癒着や炎症および浸潤の評価を行うことが有用と考えられた。(760/800 文字)